

## ペット用動物薬の高度化とその背景

### ◆ネコ専用の抗体薬をFDAが承認

22年1月、米国食品医薬品局（FDA）は米国Zoetisが開発したネコの変形性関節症に伴う疼痛の緩和薬Solensiaを承認した。Solensiaはネコのタンパク質を標的としたネコ専用の抗体薬であり、FDA史上初の動物用抗体薬の承認となる。

動物薬は、牛豚家禽や蜜蜂などに対して使用される産業動物用と、ペットに使用されるペット用に大別される。産業動物用では、食料として間接的に摂取する人の健康に与える影響を評価し、食料中での残留基準値が設定され、それを厳格に守る必要がある。また、屋外で大量に使用されることもあるため、耐性菌の可能性など環境への配慮も必要だ。一方、ペット用では、ペットの健康を守るために使用され、使用量が比較的少なく人体や環境に与える影響も軽微である。

### ◆ペット用健康保険の発達と承認要件の緩和が追い風

世界の動物薬の市場は約320億ドル（日本市場は約1,300億円）であり、1/3がペット用で、二桁成長が続いている。高額なペット用抗体薬が登場した背景としては、ペットを家族同然として扱い、高額な治療への許容度が高まったことや、ペット用医療保険の普及によるところが大きい。米国のペット医療保険市場は、22年に19億ドルに達し、年平均成長率（17～22年）は11.5%となっている（米国IBIS調べ）。日本でも、20年の保険契約数が221万件（富士経済調べ）に達した。

FDAは、ペット用動物薬に対して、人間と同じような大規模かつ長期間の臨床試験を課さず、少数の臨床試験結果で条件付き承認を与えた後、実世界で有効性と安全性を検証するMinor Use and Minor Species (MUMS) という審査経路を整備した。SolensiaもMUMSを用いた少数例の臨床試験で承認された。

ペットの遺伝子解析が行われ、ペットの病気に対する理解が進んだことも大きい。また、動物薬は人間用と異なり薬価抑制の圧力が小さく、特許切れによる後発薬登場によるダメージも少ない。競争が少なく、安定的な成長が望める点も投資を後押ししている。世界的な少子化や、ペットにお金を使う富裕層が増えていることもあり、ペット用動物薬がさらに高度化していこう。 【毛利光伸】